

歴史探訪

クラブ! 其の211

History Inquiry Club



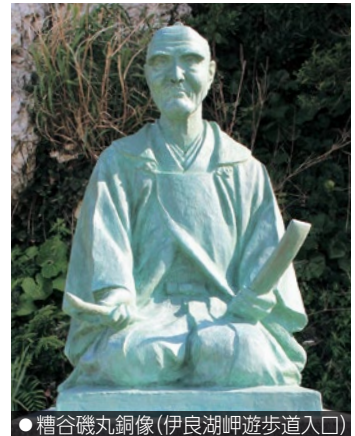
文化財課 ☎22-1720
(博物館) FAX 22-2028

疫病退散 糟谷磯丸のまじない歌

本市偉人の一人、伊良湖の漁夫歌人糟谷磯丸のまじない歌にこんな歌がありました。

「願わくは 空吹き賜え 風の神
人に障りて 何の疫癘」

疫癘とは、広辞苑によると悪性の流行病のことで、今まさに世間を騒がせている新型コロナウイルス感染症のような疫病のことをいいます。この歌の意味は、「風の神様よ、ど



うぞ大空を吹き渡って、疫病を追い払ってください。人を疫病にさせ何の利益がありませんか」となります。磯丸が活躍していた江戸時代の終わり頃にもコレラなどの恐ろしい疫病があり、その感染を予防するため、詠まれたものです。

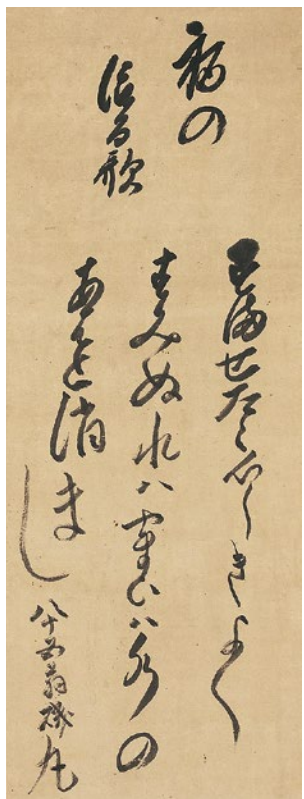
磯丸のまじない歌は、生涯たくさんの歌を詠んだ磯丸を特徴づけるものです。まじない歌といっても磯丸の場合、神秘的・呪術的な意識は少しも感じられず、ただただ民衆の困りごとや希望、喜びや祈りを頼まれるまま、天地の道理に外れないように、誠心誠意心を込めて詠んだものです。これらの歌には、当時の人々の暮らし向きや願いなどが示され、また、磯丸の人柄もよく表されています。磯丸に歌を詠んでもらい、その歌を石碑したり、掛軸にして床の

間に掛けておいたりすると不思議と願いが叶ったとされています。

古来から疫病の流行は、そこに暮らす人々にとって恐怖そのものでした。ましてや医療体制が整っていない江戸時代ではなおさらで、人々はただ何かにすがるかありませんでした。そんな中で当時よく行われていたのが疫病退散のご祈祷でした。村々の神社はもちろんで、現在の津島市にある津島神社に代参を送るといのがよく行われました。代参とは、村全体の願いを代表者に託し、その願いに適した神社へ参り、お礼を受けて戻ってくることです。

明治・大正の時代になると、ようやく疫病への対応が医学・衛生的な根拠をもって行われ始めましたが、依然として神頼み的な要素も強く残されました。そんなさなかの明治19(1886)年には、本市にコレラの

蔓延を防ぎ、自らの命を犠牲にして多くの人の命



▲糟谷磯丸筆 病の治る歌

を救った豊橋警察署田原分署(現在の田原警察署)の江崎邦助巡查夫妻の悲劇がありました。

※詳細は、『田原の文化財ガイドⅡ ふるさと』の偉人を訪ねる 田原を築いた人びと』市教育委員会発行 最後にもう一首紹介します。

病の治る歌

「すませただ 心し清く すみぬれば 病ひは水の 泡と消えまし」

この歌の意味は、「まずは心を落ち着けて澄み切った心境になってください。そのような心の状態になれば、心にこびりついている病の原因になるようなささままながれも泡のように消え、元の元気な体に戻ることができるでしょう」となります。

今回紹介した磯丸の歌二首にあやかって、一日も早く新型コロナウイルス感染症の流行が落ち着くことを願っています。(学芸員 天野敏規)